

まちの史跡めぐり

179

町文化財専門委員 石龍 豊美

新原海軍炭鉱の雑誌『新原』(3)

広報すえ5月号と7月号で、雑誌『新原』の1号から8号を紹介しました。今回は残りの6号を紹介します。

大正13年(1924年)発行

1巻9号

表紙の絵は、左上にサーカスの空中ブランコのようなもの、右下に玉乗りが描かれていて、統計数字は「福岡鉱務署管内石炭坑ノ趨勢」です。大正6年と大正12年の「休業」「稼業」別に鉱区数、坪数を書き上げています。

1巻10号

表紙の絵は、中央のグラフを、下の背中合わせに立つ二人の人物が腰を折って背中で受けているという図案です。グラフのタイトルは「世界各国坑内外従業員一ヶ月一人当り出炭量」です。

1巻11号

表は「鉱山労働調査結果」です。下の説明によると、内務省社会局の依頼により福岡鉱務署が10月10日現在で管内九州・山口・沖縄9県の「鉱山労働調査」を実施したものです。



1巻10号



1巻9号



1巻11号



1巻12号



2巻1号



2巻2号

1巻12号

表は大正13年1月から9月の「全国重要鉱山産出状況」で、金・銀・銅・鉄・石灰・石油・硫黄について産出量を書き上げています。

大正14年(1925年)発行

2巻1号

大正10年の「世界石灰の産額」を牛の絵の大小で表現したものです。なぜ牛かと言つと、丑年だったから。アメリカ・ドイツ・イギリスの順に多く、日本はフランスに次ぐ第5位でした。

2巻2号

棒グラフが「日本 明治十年以降産額」(単位は億円)、円グラフが「大正十二年内訳」で石灰が最も多く、銅・石油・金・鉄・亜鉛・銀の順になっています。

今回は1巻10号に掲載された「採炭部歌に就て」を紹介します。3月に共済会が公募し、応募者多数の中から選ばれたのが次の歌(楽譜は略)。福岡高等学校は福岡市六本松にあった、後の九州大学教養部の前身に当たる学校です。また海軍軍楽特務少尉とは海軍軍楽隊に所属する将校のことです。

福岡高等学校教授宮崎晴美撰
海軍軍楽特務少尉
志波孝一 作曲

- 一、筑紫の国に名を得たる
宝満山の麓原
黒煙天に漲りて
機械の響地に震ふ
これぞ栄光ある海軍の
動力の源の採炭部
- 二、幾千尺の地底にて
長幼男女隔てなく
汗と臍脂にまみれつゝ
昼夜をすてめ労働に
つきぬ宝庫開かれて
黒きダイヤは生れなん
- 三、その往昔を回顧ば
創業將に四十年
苦心経営今こゝに
此壮大をかち得たり
聞けよ誇りと喜に
我等の胸の高鳴るを
- 四、たとへ脚は異なるも
つくす赤誠は一筋に
協力一致の旗じるし
高くかざして国の為
世界の為めに働かん
働かんかなあゝ我等

採炭部歌